



## 結果と考察

表1に平成10年度の漁業日誌の集計結果を月別に、表2に地区別にまとめた。

表1 漁業日誌月別集計結果 .

		月											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
漁獲量 (kg/日/1人)	大型	22.5	25.7	23.7	25.3	27.0	29.6	20.6	20.8	24.8	23.4	20.3	20.0
	中型	32.8	41.7	45.9	50.1	54.8	56.1	51.4	58.1	42.4	28.0	16.4	11.5
	小型	14.7	30.1	24.8	28.1	30.5	33.8	39.6	35.1	27.1	14.6	12.6	11.0
	合計	70.1	97.4	94.4	103.6	112.2	119.5	111.6	114.1	94.3	66.0	49.4	42.5
単価 (円/10kg)	大型	6528	5942	5734	5636	5389	5081	5188	5353	5883	6886	7032	7230
	中型	5471	4430	4296	4124	3914	3494	3648	3815	4323	5371	6015	6529
	小型	4406	3465	3443	3341	3041	2724	2864	2982	3314	4462	4895	4839
	平均	5468	4612	4491	4367	4115	3766	3900	4050	4506	5573	5981	6199
操業日数 (日/月)		15.0	15.4	16.8	16.4	14.3	16.0	15.9	15.6	14.7	10.8	13.5	15.1
	手掻き	3.1	4.7	4.1	4.4	3.6	4.0	3.3	2.8	3.0	2.7	3.0	1.8
	機械掻き	11.9	10.8	12.7	12.0	10.2	12.0	12.7	12.3	11.7	7.3	9.3	12.1
操業時間 (時間/日)		2.9	3.1	2.9	2.8	2.7	2.7	2.6	2.7	2.9	3.1	3.0	2.9
ガボ (%)		13.3	5.1	5.3	4.6	2.6	3.3	4.3	4.2	9.5	11.4	16.0	5.7
回答者数 (人)		30	33	32	33	31	32	28	28	27	24	24	12

表2 漁業日誌地区別集計結果 .

		地区				
		東部	湖北	平田	斐川	湖南
漁獲量 (kg/日/1人)	大型	31.8	24.1	21.6	31.0	14.2
	中型	42.0	40.8	53.9	35.9	43.1
	小型	18.9	34.1	13.7	26.2	34.8
	合計	92.7	99.0	89.3	93.2	92.1
単価 (円/10kg)	大型	5092	5718	6924	6500	5091
	中型	3822	4367	4983	4897	4247
	小型	3508	3404	3849	3864	3275
	平均	4141	4496	5252	5087	4204
操業日数 (日/月)		13.5	14.7	16.0	16.3	15.1
	手掻き	10.9	2.8	0.0	0.0	3.3
	機械掻き	1.8	11.6	15.9	16.3	11.8
操業時間 (時間/日)		3.5	2.8	2.9	2.5	2.6
ガボ (%)		5.2	5.8	5.5	11.3	7.5
回答者数 (人)		65	73	60	57	79

図1に平成10年度の1日1人あたりの漁獲量と平均単価の経月変化を示した。これをみると、春は前年(平成9年)の大量へい死の影響からか、漁獲制限の半分ほどしか漁獲されていないが、夏から秋にかけては、漁獲制限近くまで漁獲されるようになっている。しかし、また冬になってから漁獲量が減少し、春よりも少なくなっている。

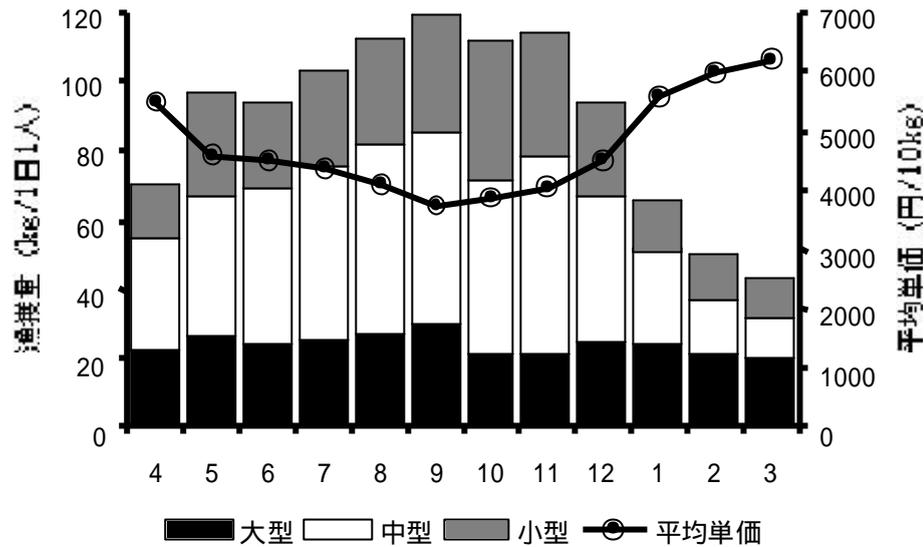


図1 1日1人当たりの漁獲量と平均単価の経月変化（平成10年度）。

図2に平成10年度における時間あたりの漁獲量と操業時間の経月変化を示した。時間あたりの漁獲量の変化は、図1の漁獲量と同様で、夏から秋にかけて高くなっている。それとは逆に、操業時間は夏から秋に若干少なくなるが、年間を通して1日約3時間となっている。

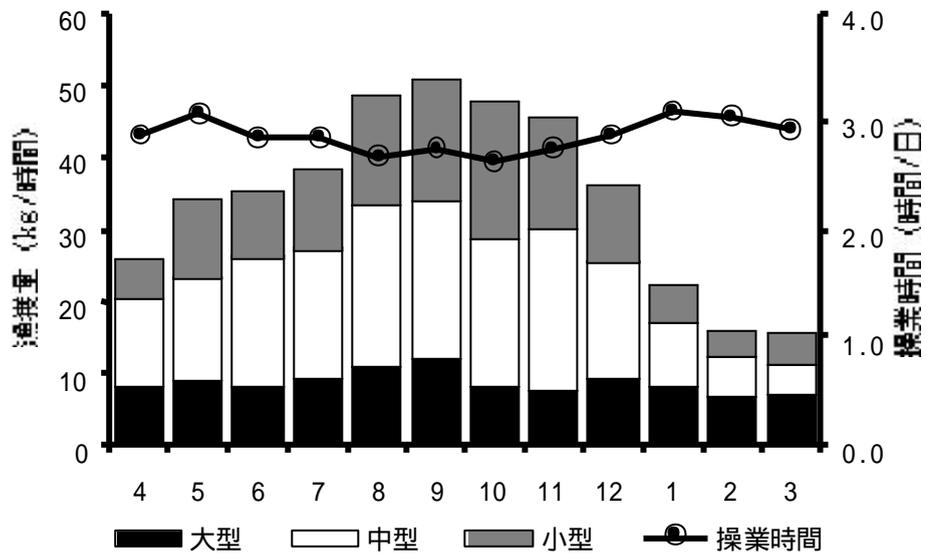


図2 1時間1人当たりの漁獲量と1日1人当たりの操業時間の経月変化（平成10年度）。

以上が、平成10年度におけるシジミ漁業の概要であるが、平成9年度のへい死により宍道湖のシジミ漁業がどのように変化したかをみるために、大量へい死が起きた平成9年度およびその前年の8年度と比較してみた（図3、4）。

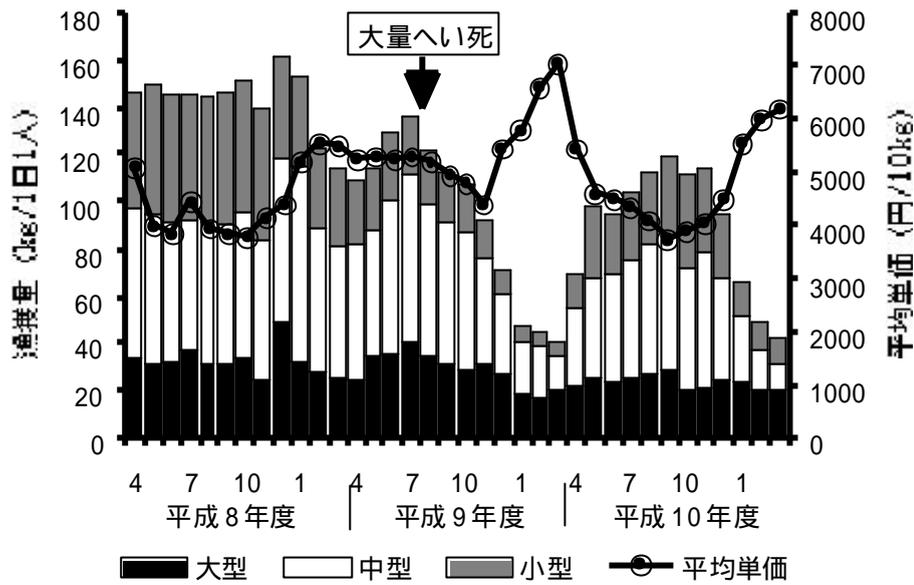


図3 大量へい死前後における1日1人当たりの漁獲量と平均単価の経月変

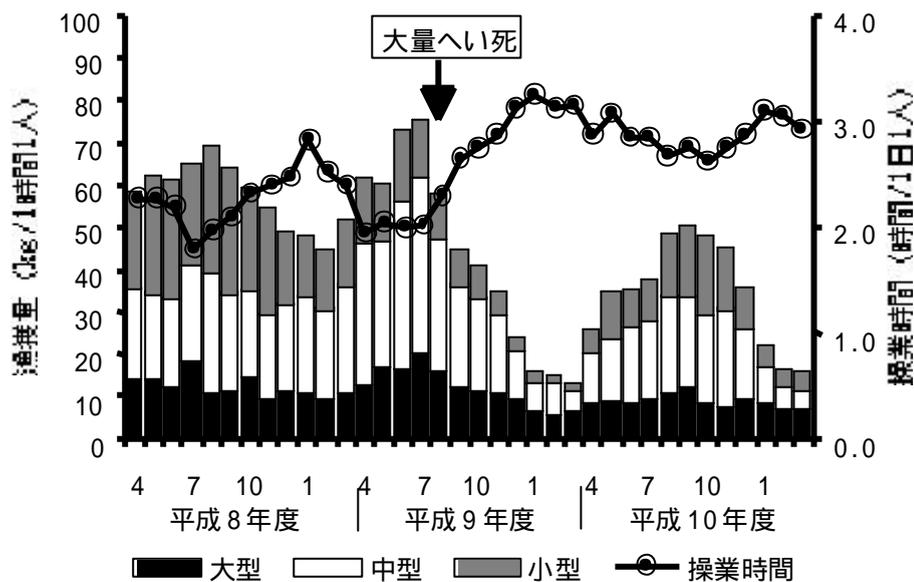


図4 大量へい死前後における1時間1人当たりの漁獲量と1日1人当たりの操業の経月変化。

大量へい死前の平成8年度では、周年ほぼ漁獲制限まで漁獲されている。しかし、大量へい死後漁獲量は減少し平成9年度の冬には1日1人あたり約40kgまで落ち込んでいる。その後、平成10年度になりいったん漁獲量は増加するが、それでも漁獲制限よりは若干少なく、冬になり再び減少している。

時間あたりの漁獲量の変化は、夏から秋にかけて高くなっている。それとは逆に、操業時間は夏から秋に少なくなっている。これは、冬になるとシジミが深く潜るため操業に時間がかかると考えられる。

しかし、大量へい死以前は、操業時間を長くすることで季節にかかわらず漁獲制限まで漁獲していたが、大量へい死後、操業時間が長くなっているが、時間あたりの漁獲量は減少し、1日あたりの漁獲量も減少している。

これらのことから、大量へい死によるシジミ資源の減少がシジミ漁業に大きく影響を与え、大量へい死から1年経過した現在でも継続しており、深刻な問題となっていることが示唆される。